

地域医療の現場から



九州の中心で “地域包括医療”をさげぶ

山都町包括医療センター そよう病院
(旧 山都町立国民健康保険蘇陽病院)
院長 水本誠一

病院の概要

- 設立年月：昭和 22 年 4 月
- 許可病床数：57 床（一般病棟）
- 入院基本料：10 対 1
- 職員数：62 人
(再掲)
常勤医師 4 人（歯科含む。）
非常勤医師 11 人
(小児外科・循環器内科・
整形外科・眼科・心療内科)
看護師 37 人



病院は平成 24 年 11 月に新築移転し、名称も変更して、新たなスタートを切った

念願の新築移転

当院は、熊本県では東の果ての辺境の地ですが九州地図ではまさに“中心”に位置し、昨年で開院 65 周年を迎える病院です。これまで山都救急医療圏で唯一の救急告示病院として、また、へき地医療拠点病院として、さらには当地区での地域包括医療の拠点としての役割を必死で担ってきました。一方で、当地域は「政争の町」として県下に有名で、機器購入にからむ不正事件など、町立病院が政争の具となることもあり、老朽化した病院の建て直しがなかなか実現しませんでした。しかし、さまざまな改革の結果 3 年連続の黒字決算を達成できたこともあり、昨年 11 月にようやく新病院が新築落成しました。

町長が唱える「病院らしくない病院・老いも若きも、病人も健康な人も集える病院」の理念と、田舎だけになおさら「プライバシーの守れる病院」を目指して設計しました。診察だけの患者さん、検査などが必要な患者さん、スタッフの三者の動線が重ならないような造りになっています。また、病室は四人部屋のベッド間に移動可能な仕切り家具を設け、個室感覚で療養できるように留意しました。隣接した芝生広場では、毎日グラウンドゴルフに興じる声が病室まで聞こえ、患者さんの回復に向けた意欲も湧くことでしょう。



プライバシーに配慮し、四人部屋の病室も仕切り家具によって個室感覚で療養できるようにした

新病院名に込めた思い

新スタートとともに、病院名も少し変更し「山都町包括医療センター そよう病院」となっています。医療に加えて保健(健康づくり)、福祉(介護)サービスまでを総合的・一体的に提供する「地域包括医療・ケアシステム」の拠点となることが国保直診病院としての大きな活動目標です。そのことを明確にするための変更です。

全国の国保直診病院の多くには「国民健康保険」の文言がついていますが、漢字表記が長くなり重たい感じがあるため、あえて病院名から割愛させていただきました。また、町民全体の皆さまがいつでも受診していただけますという思いも込めています。さらに、地理的位置を示すために、漢字ではやや重たい感じのする「蘇陽」をひらがなで残しました。

少々荷が重く気恥ずかしい名称ですが、まさに次に述べるような活動を通じて地域包括医療を進めたいと考えています。

地域包括医療の充実を目指して

合併で町域が広がったことをチャンスと捉え、町の広報誌に「病院だより」のページを設けてもらい毎月病気の解説(啓発)等を掲載し、また、医師が交代で町健康教室、地域公民館での「老人会」「リハビリ教室」、小中学校での「PTAの講演会」などに積極的に出向いて講演を行い、疾病予防に一役買っています。

また、町の保健師、社協職員、老人介護施設の職員、ケアマネジャー、地域の開業医を集めて「地域福祉担当者会議」を毎月行い、地域の患者さんのケースを丁寧に検討し、それに基づき訪問看護や訪問診療の計画を策定し、病院以外での医療を展開しています。加えて、当院は県指定の「へき地医療拠点病院」として、3か所のへき地診療所を運営し毎週1回ずつの診療を行っています。復路には、寝たきり老人を在宅で看ている家庭を訪問し診療しています。



地域福祉担当者会議。毎月1回、多職種が集まってケースの検討などを行っている

医療の面だけに限らず、「病院づくりは町づくり、町づくりは病院づくり」の理念の下、さまざまな取り組みも行っています。全国の田舎と同様、当地区にも高齢者世帯や独居世帯が多くなり、容易に買い物もできないいわゆる“買い物難民”が数多くいらっしゃいます。そこで、新築に合わせて“買い物難民支援ショップ”を立ち上げました。地元商店街で共同体を作っていただき経営委託し、各商店が得意とする商品を持ち寄って納入していただき、患者さんが月に1回の病院受診の際に当面の生活物資も買えるような売店です。その場にほしいものが無いときには本店からすぐに取り寄せ、宅配もするというものです。ユニークな取り組みとして、県と町から補助金もいただきました。他にも、地域の夏祭りには病院職員で「エイサー隊」や「早朝そうじ隊」を結成し参加しており、町全体の賑わいに花を添えたりもしています。

深刻なへき地の医師不足、どうすればよいのか

医師不足が叫ばれ「地域医療の崩壊」という言葉も浸透してきた感がありますが、へき地医療の医師不足は依然としてかなり厳しいものがあります。頑張れば頑張るほど医師が去ってゆく感じもあります。これまで「職業選択の自由」を盾に医師の進路は自由であり続けましたが、高齢化と経済縮小の時代を迎え、もうそれは限界ではないでしょうか。診療科（専門医）の適正数の管理、医師の地理的配置の管理を国や行政が責任もって行うことがもう必要だと考えています。

患者さんを総合的に診てゆけて、感謝も十分にしてもらえる、やりがいのある地域医療です。参入してくださるお医者さんは誰かいませんか——！